

凜として

登場人物

- 梶谷凜……………(かじたに・りん)
梶谷ソデ……………(かじたに・そで)
梶谷俊平……………(かじたに・しゅんぺい)
吾妻颯太……………(あがつま・そうた)
村田トメ……………(むらた・とめ)
村田吉松……………(むらた・よしまつ)
村田定次……………(むらた・さだじ)
村田房子……………(むらた・ふさこ)
島田安子……………(しまだ・やすこ)
松永伸代……………(まつなが・のぶよ)
野本梅子……………(のもと・うめこ)
安岡哲……………(やすおか・てつ)
和尚・竹村孝徳……………(おしょう・たけむら・たかのり)

昭和二十三年秋。数件の漁師の家が軒を並べる海辺の集落。舞台中央に広場があり、境目のハッキリしない古い家屋の連なりの中に上手下手に出はけ口。上手のバラックの前でソデが魚の干物を干している。下手通路より汚れた軍服にリュックを背負って吉松登場。気づかずに作業をしているソデを見ている。

ソデ (気配に気づき振り返り、目が合う) …吉松ね。

吉松 (ニタリとして) そうたい、吉松たい。

立てかけてあった棒で吉松の足を確かめるソデ。

吉松 何ばしよつと？

ソデ あんた死んだって、戦死の公報も来ただよ。

吉松 はあ？

ソデ 幽霊じゃなかね。

吉松 (笑う) そうね、死んだことになつとつたね。確かにシベリアで何回も死にかけて、そりゃあ酷か目におうたばってん、(おどけて) 村田吉松二等兵、こうして無事祖国日本の土は踏む事が出来ました。(敬礼)

ソデ

…(気のない)苦勞さん。(作業再開)

吉松

何ねオバチャン、もつと喜んでくれんね。

ソデ

(作業しながら)吉松、あんた怨んだら駄目ばい。誰も悪無かとやけん。悪かとは国たい、悪かとは戦争たい。

吉松

ばってんもう戦争は終わった、そうやろ。(リュックを下ろし)分かつとる。もう国も戦争も関係無か、何ばしたって個人の自由たい。こいからはやりたかことばやる、オイはもう頭ば切り替えたけん。

ソデ

そん方が良か。

吉松

オバチャン、オイはね、もう大抵の事じやびつくないせんし、恐ろしかもんも無か。極寒のシベリア、ロスケのラーゲリーで、人間はこい以上苦しか思いは出来んていう経験ばして来たど。

ソデ

そうね。

吉松

命からがら舞鶴に上陸して佐世保に着くまで、途中大阪、広島、博多、びつくいすることばつかい見た。確かにこん国は変わったよ。日本の女がアメリカ兵の腕にぶら下がつとる姿ば見たときは、銃ば

持つとつたら撃ち殺してやるかて思った。正直、オイたちや何の為に戦争したとやるかて思うたばってん、(房子が上手より登場、吉松を見て固まる)ばってん、オイはこがんしてして生きとる。生きて帰って来たからにや(房子に気づき)：房子(歓喜の表情)。

房子
：何で：何でね…。

吉松
黙って帰ってびつくいさせようて思ったたい。

房子
：あんた。

吉松
待たせたな、(両手を広げ)房子。

房子
嫌、

吉松
え、

房子
嫌(上手に走り去る)

吉松
：房子、

ソデ
悪かとは、戦争したい。

吉松

(房子の後を追い上手へ)房子〜。

黙々と作業を続けるソデ。下手より凜、登場。

凜

お義母さん、後はうちがやります。ダゴ汁ばかりしましたけん、冷めんうちに食べてください。

ソデ

…うん。(上手を見る)

凜

何かあったとですか？

ソデ

凜、村田ん家の吉松、帰って来たばい。

凜

え、吉松さんて…。

ソデ

うん、死んどらんやった。

凜

ばってん…。

ソデ

ねえ。帰って来んで良か人間は帰って来て…。

凜

お義母さん、

吉松(声) 待てこのバイタ、

房子(声) やめて、

上手より房子が走り出る。房子を追いかけて吉松も登場。鎌を持った吉松に追われる房子。

吉松 待たんか、

房子 嫌、嫌、

軒の柱を挟んで吉松の手を逃れようとする房子。

房子 来んで、来んで、

定次 (上手より登場)兄ちゃん、話は聞いてっ、話は聞いてっ、

吉松 せからしか、(定次を鎌で威嚇し、向き直り)こっち来い、こっち来い房子。

房子 嫌、嫌、

定次 兄ちゃん、

凜 (吉松に)あの、

ソデ 凜、よそん家のゴタゴタに口ば出さんとよ。

凜 ばってんお母さん。

吉松 房子お前は、オイがどがん思いで帰つて来たて思とつとか。

ソデ 凜、踏まれたら売れんけん片付けよう。

凜 は、はい、

干物を箆に戻し始める凜とソデ。黙々と片付けるソデ、吉松達が気になる凜。

吉松 房子、お前は、

定次 兄ちゃん勘弁して、勘弁してつて、(吉松をとめようとする)

吉松 馬鹿たれ、(定次に向かい鎌を振り回す)

定次 うわっ、(鎌を避けようとして転がる)痛、

房子

定ちゃん、

定次

義姉さん、

吉松

(互いを気遣う定次と房子を見て)お前たちや、(叫ぶ)房子、

房子

助けて、(逃げ惑う)

定次

兄ちゃん、

吉松

逃ぐんな、逃ぐんな房子、

房子

(干物の干し台をはさみ)うちにやどがんもこがんも出来んやったと。

吉松

房子、

房子

あんたの、あんたのお母さんが決めたとよ。

吉松

(にじり寄り)こっち来い、こっち来い房子。(帽子を捨てる)

房子

嫌、まだ死にと無か、死にと無かもん。

吉松

何もせん、何もせんけんこっち来い。

定次 何もせんとなら、鎌ば置いてくれんね兄ちゃん。

吉松 定次、お前もお前たい。兄貴の嫁に手出して、お前達や犬畜生か。

定次 しようが無かやろう。戦死の公報が届いたら、兄ちゃんは死んだて思うたい。そいけん家のもんみんなで決めたたい。村田ん家ば守るにはそいが一番良かつて、母ちゃんもそいが良かつて。

吉松 (叫ぶ)せからしか。そこで待つとけ、房子の次はお前たい。

定次 兄ちゃん、

吉松 (房子に向き直り、にじり寄る)房子、房子、

房子 来んで、来んでつて、

吉松 お前は、お前は、

房子 嫌、(逃げようとして転ぶ)あつ、

吉松 このバイタ、(ころんだ房子を上から押さえる)

定次 (鎌をつかむ)兄ちゃんやめろ、

吉松 放せ、放せ定次、

定次 (鎌を取り上げ)ごめん兄ちゃん、(吉松を殴る)

吉松 うわっ、(転がる)

定次 (房子を庇い)逃げる、逃げる房子、

立ち上がり下手に走るが、気がかりで二人を見ている房子。

吉松 いててて、(立ち上がり)定次、兄貴のオイに何ばすつとか。

定次 兄ちゃんこそ、姉さんば責めてもしょうが無くて分からんとね。

吉松 房子はオイの女房たい。女房がこがん事して黙つとらるつか。

定次 兄ちゃんが、姉さんば殺そうてすんなら、オイは命がけで姉さんば守る、房子ば守る。

吉松 房子って言うな。お前の嫁じゃなか、房子はオイの嫁たい。この馬鹿たれ(定次に殴りかかるが、逆に腕を取られ)痛っ、たたたた、

定次 兄ちゃん、ごめん。(吉松を投げ飛ばす)

吉松 うわっ、(転がる)いたっ、たっ、

定次 ごめん、

吉松 (立ち上がり)このっ、(再び殴りかかり)うわっ、(また投げ飛ばされ)
あいたっくっそっ、

定次 …ごめん、兄ちゃん。

吉松 ちくしょう、ちくしょう、ちくしょく(泣き崩れ)死ぬ思いで、帰っ
て来たのに…ちくしょう…。(地面を叩く)

房子 …あんた。

吉松 (消え入るように)…馬鹿たれ…馬鹿たれ。

ソデ 凜、帰るよ。

凜 はい、

下手に向かうソデ。

吉松 待たんね、待たんねオバチャン。オバチャンはどがん思うね。

ソデ 他人が口出しするこつちや無かるが。

吉松 子供ん頃、オイ達が悪さしたら、オバチャンいつでん説教したたい。

こがんなつたら、オイはオバチャンの言う通りにする。

定次 兄ちゃん、

オバチャンはどがん思う。弟が、兄貴の嫁ば取るて、こがんことの許さるつて思うと？

定次 兄ちゃん、

オイは、満州でん、シベリアでん、房子んことだけ考えとつた。生きて帰つて、房子ば喜ばせてやらんばつて、そいだけば思うて、帰つて来たとよオバチャン。

…選ぶとは、房子さんじゃなかとね。

吉松 え、

ソデ

選ぶとは房子さんたい。鎌持って追い回す男と、命がけで守るっていう男、どっちが自分ば幸せに出来るやろかって。

吉松

(ソデを見つめる)…。

ソデ

雲行きんおかしか。雨ん降るかも知れん。

下手に退場するソデ。ソデを目で追うが、吉松が気になり立ち去れない凜。

定次

…家で待つとるけん、落ち着いたら帰って来て…母ちゃんと四人で、ちゃんと話そう。なつ、兄ちゃん。

吉松を残し、上手に退場する定次と房子。しばらく吉松を見ているが、やがて帽子を拾い、吉松に渡す凜。

凜

…何て言うたら良かか、分からんとですけど…元氣ば出して下さい。

吉松

…あんだ…梶谷んこの嫁ね。

凜

はい…凜って言います。

吉松

…俊平は、

凜

あん人も、吉松さんに少し遅れて招集されて、まだ帰って来とらんです。

吉松

…生きとつとね？

凜

分かりません。

吉松

分からんて…あんた、俊平とは…。

凜

あん人が出征する三日前に嫁に来ました。よう知り合う時間も無かったけん、俊平さんの事はあまり知らんとです。

吉松

…そりや、良かったたい。

凜

え、

吉松

祝言挙げただけ、形だけの嫁なら亭主の帰りば待たんでも誰も文句は言えん。俊平も恨まんよ。オバチャンに頼んでさっさと離縁して貰えば良かったい。

凜

ウチは、待ちたかとです。

吉松

(凜を見る吉松)…まあ、勝手にすれば良か。

凜

吉松さん、俊平さんの幼馴染みですよね。お義母さんに聞きました。こまか時からいつも一緒に遊びよったって。

吉松

…そいけん何ね。

凜

今度、あん人のことば色々教えて下さい、子供ん時の事とか。知りたかどです、俊平さんの事。

吉松

…あんた、どがん神経ばしとつとね。オイはたった今嫁に裏切られた男ばい。

凜

…すみません。

吉松

俊平はね、こすか男やった。

凜

こすかつて、俊平さんがですか。

吉松

そうたい、あん男は卑怯もんたい。一緒に悪さしてん、いっつも自分だけ痛か目に遭わんごとしとつた。臆病もんで、逃げ足も速かつた。あつ、戦地でも弾の飛んでこんとこばつかい逃げ回つとつたやろけん、生きて帰って来るかも知れんね。

凜 ……そうですか。

吉松 悪かったね、あんまい良か話の出来んで。

凜 いいえ、そいが本当なら嬉かです。卑怯もんでん臆病もんでん何でん良かとです。生きて帰って来てくれたら嬉かです。

吉松 馬鹿じゃなかと。死んどるに決まっとつたい。オイのごとシベリアに抑留されとつた人間は特別たい。三年も経って、帰って来とらん奴は生きとる筈ん無か。あんた、待っても無駄ばい。

凜 ……もし無駄でも、ウチは待ちたかとです。(吉松の様子に気づき) ……すみません。

凜 凜を見ているが、立ち上がり、リュックを背負う吉松。下手に向かう。

凜 家に、帰らんとですか。

吉松 ……オイの家は、もう無か。(下手に向かう)

トメ (上手より登場)吉松、

吉松 (振り返り)…母ちゃん、

トメ …吉松…よう帰ってきたね。

吉松 …母ちゃん…何でね。

トメ …吉松、

吉松 (叫ぶ)何でね、

何も言えないトメ。暫くトメを観ているが、やがて下手に退場する吉松。

トメ …(涙声)吉松

— 暗転 —

舞台下手、手前に浮かび上がる梅子と伸代。

梅子 ツワはツワブキ、アゴはトビウオ、

伸代 アラカブはね、カサゴって言うらしかよ。

梅子 面白かったけん、テボにはいっとった「ミナ」ば見せて、じゃあこ

いは何て言うんですかって訊いたったい。そしたら、

伸代

(物まね調)「巻き貝ですね。でもこんな小さな貝、食べられるんですか」って。本なことそんな言葉が、ラジオば相手に話しとるごたつた。

梅子

ばってん色ん白か良か男で、こん人誰かに似とるねって思たとよ。

伸代

そう「東京から、おいでになったと？」って訊いたら、ニコッて笑うて「ハイ」て言わしたもんね。そん顔が、誰かに似とるって思たつた。

梅子

ばってん誰に似とるとか、初めは思い出せんで、まあそがんこととはどがんでん良か、商売、商売って思うて「活きの良か魚はどがんですか」って言うてみたと。そしたら、

伸代

「じゃあそのカサゴ、いやそのアラカブを一匹」

梅子

「ありがとうございます。食べ易かごと、ジゴば出しときましようか」

伸代

「ジゴ？」

梅子

「ジゴはハラワタです。裁いて出した方が料理し易かでしょ」

伸代 「あくハラワタ。いえ結構です、食べる前に絵を描きたいので」

梅子 「絵ば描くとですか、こん魚の」

伸代 「はい。僕こう見えて、絵描きなんです」

梅子 という事で、そんな人は絵描きさんちゆう事が分かったと。それから、

伸代 「それにしても立派なカサゴですね」

梅子 って、アラカブば見る時に、掛けとつたメガネば外して手ぬぐいで拭かしたとよ。(伸代、メガネを外して手拭いで拭くそぶり)そう、そんなメガネば外した顔ば見て、ウチたちや思い出したと。

伸代 そう、思い出したと、誰がそんな人に似とるとか。

二人 俊平たい。

伸代 そんな絵描きさんは、あんたの旦那によう似とるとよ。

梅子 本なこと、メガネばとつたら俊平そっくりやった。うんにや、俊平

よりもう少し良か男かも知れん。(笑)

伸代　とにかくそんな絵描きさんは、あんたの旦那に良う似とったとよ、

二人　凜。

梅子と伸代の照明が消え、クロスして舞台上手の手前にスポット。照明に浮かぶ吾妻凜太、腰を下ろし、海を見ながらスケッチブックに鉛筆を走らせている。やがて舞台明るくなり、下手から登場する凜、舞台中央の奥で藁束を持って立ち尽くす。(数日前に梅子と伸代が話していた東京から来た男と思われる人物が、今、目の前で絵を描いている) 凜太が筆を休め、何気なく振り返り、凜と目が合う。暫く見つめ合う二人。

凜太　僕の顔に、何かついてますか。

凜　あ、すみません、ちよっと噂ば聞いとったもんやけん。

凜太　噂、

凜　はい、

凜太　僕なんかの噂をする人がいるんですか。

凜

東京から、絵描きさんの来とらすつて。

颯太

え、

凜

魚売りから、アラカブば買わしたでしよ。

颯太

あゝあの行商の、

凜

二人とも知り合いですけん。

颯太

そうですか。

凜

あ、悪か噂はしとらんですよ。ただ、田舎ですけん東京人とかは珍しかとですよ。

颯太

言葉が変なんでしょ。こつちに来てから、よく子供達に言われます。

凜

変じゃ無かですよ。綺麗か言葉です。

颯太

東京から来た、言葉が変な絵描き。噂は、それ以外にも何か。

凜

…いえ、そいだけです。

颯太

(笑顔)そうですか。

凜

失礼しました。(上手に去ろうとする)

颯太

あ、ちよつと待って、

凜

何ですか。

颯太

あの：「美^{うつく}しき天然」という歌、ご存じですか。

凜

え、

颯太

ほら、(メロディーを口ずさむ颯太)

凜

あくそん歌やったら、何か佐世保にゆかりのある歌って、聞いたり
ます。

颯太

じゃあ、この歌を作曲をした田中穂積^{たなかほづみ}をご存じですか？

凜

：いいえ。

颯太

ですよ。こつちに来て驚きました。この歌について地元の人が案

凜

そがんですか。
外詳しく無いんですよ。作曲した田中穂積という人は元々海軍の軍楽師で、彼が昔、佐世保の女子校で音楽を指導したときに教材として作曲したのが、この「美しき天然」なんです。

颯太

「空にさえざる鳥の声。峯より落つる滝の音。大波小波とうとうと、響き絶やせぬ海の音」それから「調べ自在に弾きたもう神の御手の尊しや」と続くんですが、波の音や鳥の声を、「神の手による調べ」と呼びたくなるなんて、そんな景色、見てみたいと思うじゃないですか。

凜

そがんですかね。

僕はこの曲の元になった景色を、絵に描いてみたいなと思って東京から来たんです。

凜

わざわざ、そんな為に。

颯太

田中穂積は特に、佐世保の穏やかな海に抱かれた無数の島々の情景に影響されて、この曲を作ったとされているんです。

凜

…はい。

颯太

でも、見つからないんですよ、それが。

凜

みつからない、

颯太

確かに佐世保は海も山も綺麗ですが、市街地はまだ空襲の跡が残っていますし、何より、期待してた自然の中の宝石のような海、そんな景色が見つからなくて。

凜

そがんですか、申し訳ありません。

颯太

あ、いえ、別にあなたのせいじゃないんですが。

凜

見晴らしの良か所に登ってみられたら、どがんですか。

颯太

えぼしだけ ゆみはりだけ
烏帽子岳も弓張岳も登ったんです。山頂からの景色はどちらも素晴らしいんですが、空襲で焼かれた街が目飛び込んできて、いや単純に人工的な構造物が多すぎて、想像していた景色とは…。

凜

あの、すみません。仕事のありますけん。

颯太

あ、そうですね、失礼しました。

凜

…ウチ達は、まだ、生きて行くだけで精一杯ですけん。

颯太

ゴメンなさい、気を悪くされました？

凜

いいえ、そがんことは無かですけど。

颯太

旅行者のお気楽な話ですよ。申し訳ありません。

頭を下げる凜、上手に向かおうとするが、立ち止まり。

凜

あの、

颯太

はい？

凜

…石岳の方に登られたら良かかも知れません。

颯太

石岳、

凜

はい、かしまえ鹿子前つていう所に、ウチ達がいつもアサリば採りに行きよる小さか干潟があります。その辺が石岳に向かう登り口になります。

颯太

石岳に登る途中には、くじゅうくしま九十九島ば見渡せる場所が何カ所かあって、島影に沈む夕日が綺麗に見ゆつとです。

そうなんですか。

凜

そこからは街は見えんし、建物もなんも見えんです。見ゆつとは海と島だけ、綺麗か夕陽の見ゆるです。行ってみられたら良かかもしれません。

颯太

ありがとうございます。それはいい話を聞いた。あの、僕あがつま吾妻と言います。吾妻あがつまそら颯太、よろしく。

凜

…凜です。

颯太

凜さん。実は僕、この近くのお寺に間借りをしてるんですよ。

凜

…西明寺さいみやうじですか。

颯太

そうです。市内の旅館はみんな空襲でやられてるし、お寺だったら泊めてくれるかなと思って頼み込んだら、和尚さんが、いいよって。だから絵を描き終えるまで、しばらくは滞在するつもりなんです。

凜　　そがんですか。

下手よりソデが現れる。

颯太　凜さんあの、厚かましいんですが、もし良かったら、次にアサリを

採りに行かれる時に、案内して貰えませんか。

凜　　案内、

颯太　ええ、そのアサリを採りに行かれる海岸辺りまでで良いので。

凜　　…ばってん…。

颯太　是非お願いします。そうして頂けると助かるな。(メガネを外し、ハンカチで顔を拭く)何しろ道が分からなくて。(俊平によく似ている)

凜　　…すみません、案内は出来んです。

颯太　…あの、

凜　　今度いつ行くかも分からんし…すみません。

颯太 …分かりました。

ソデ 凜、

凜 お義母さん。

ソデ 貝堀りやったら、明日一緒に行こうか。

凜 明日は無理ですよ。藁草履、早よ作らんば、頼まれた数出来んです。

ソデ そうね。

凜 (颯太に)申し訳無かです。

颯太 いえ、こちらこそ。でも石岳、登ってみます。ありがとうございました。

お互いに会釈する凜と颯太。下手に退場する颯太。

ソデ 案内、してやれば良かったとに。

凜 よう知らん人ですよ。

ソデ

どこん人ね。

凜

東京から来た絵描きさんで、西明寺に、間借りしとるって。

ソデ

西明寺に…あん人、ちよつと俊平に似とったね。

凜

そうですか。

ソデ

うん。俊平はもうちよつと色ん黒かったばってん、目鼻立ちも背格好もよう似とった。

凜

俊平さんは、今ん人んごと「喋り」じゃ無かったです。ウチは男の喋りは好かんです。俊平さんは男らしく無口な人やったもん。

ソデ

無口って、何ば言いよつと。俊平は「喋り」たい。

凜

俊平さんがですか。

ソデ

そうたい。(笑)凜がそがん思つたなら、俊平は猫被つとつたたい。凜に嫌われんごと猫被つとつたよ。

凜

そがんですかね。

ソデ

そうたい。(笑った後、しんみりと)…凜、

凜

何ですか。

ソデ

…すまんね。

凜

え、

ソデ

あんた、亭主の事は知る時間も無かったもんね。

凜

お義母さん、

ソデ

ウチャ本と悪か事ばした。

凜

何ば言いよつとですか、お義母さん。

ソデ

あん時、ウチは我が息子ん事しか見えとらんやった。戦地に行く俊平に、嫁さんばもたせてやりたかてばっかい思て、残さるつ嫁さんの事は考えとらんやった。

凜

お義母さん。

ソデ

：俊平が行ったとは南方やけん、シベリア抑留は無か：もう、生きとらんかも知れん。

凜

そがん事は無かです、お義母さん。俊平さんは必ず、

ソデ

凜：良か縁のあつたら、戦死の公報は待たんでも良かよ。

凜

おかしか事言わんで下さい。ウチはこん家に来て良かつたって心底思とるとですよ。

ソデ

ありがとう、凜：ばってんね、

凜

ウチは花嫁修業も何もせんで嫁いで来た情け無か嫁です。そんなウチに、お義母さんは優しいゆう色々教えて、おかげで俊平さんば待つとる時間も楽しかです。こがん有り難か話は無かつて思とつとですよ。

ソデ

そいばってん、

凜

お義母さん、ウチはもうお義母さんの娘です。娘ば家から追い出さんでください。

ソデ

：凜。

— 暗転 —

闇の中に聞こえる消灯ラッパの音。

哲(上手スポット)新兵さんはかわいそうだね、また寝て泣くのかよ。(暗転)

舞台明るくなり、のぼり旗と大きな風呂敷包みを持った吉松と哲が上手より入ってくる。旗を振る哲、口上を始める吉松。

哲・吉松 (突撃ラッパの真似)パッ。パラ。パラ。パー、パッ。パラッ。パラ。パー。

吉松 え、爺ちゃん婆ちゃん嫁舅、ひな鳥のごと口開けて餌をばせがむ子供達。日々これ家族のおマンマの為、今日も額に汗をば流し労苦にいそしむ集落の皆さん、ご苦労様。おい哲、

哲 う、うん、(風呂敷を解き、缶詰や袋物の食材を並べ始める)

吉松 本日はわたくし村田吉松が社長の重責をばあい務めます吉あんど

哲・世界貿易カンパニーよりご挨拶に参りました。

下手より伸代と梅子が登場。

伸代 (梅子に)何の騒ぎね、

梅子

知らん。

吉松

そこのお二人さん、こつち来て。珍しか物のいっばい揃もんとりますよ。

梅子

あら、何ねあんた吉松じゃなかね。

伸代

本なこと、悪たれの吉松たい。

吉松

あくこれはこれは、伸代さんに梅子さんでしたか、ごきげんよう。

伸代

気持ちん悪か、何ば「さん付け」で呼びよつとね。

吉松

(笑顔)こつちも気持ち悪かばつてん今日は一応「ビジネス」やけん。

梅子

はあ？

伸代

何ばしたかとか知らんばつてん、吉松、あんたの馬鹿はいつちよん
変わつとらんごたんね。

吉松

お二人の不細工な顔ん作りも、いつちよん変わらんたい。

伸代

相変わらずひねくれとるごたつし。

梅子

吉松あんた、どこ行つとったとね。

吉松

どこつて、戦地たい。万歳万歳つて無責任に送り出したくせに、忘れたと。

伸代

そうじゃなか。あんた一回帰つて来たと言ろが。

梅子

あんたの母ちゃん泣いとったよ。ウチの吉松は生きて帰つて来たのに、話もせんで出て行つたつて、

吉松

(ふざけて)そがんですか。

梅子

そりやあ房子さんの事は、あんたにはきつかったやろばつてん。

伸代

起きてしもたことは仕方なか。

梅子

そう、仕方なかとよ。

吉松

そがん話は良かけん、二人共こつち来て見てみれつて。

梅子

(商品を覗き込み)何ね、こいは？

吉松 専務、ちよつと説明ばしてやって、

哲 専務？

吉松 お前たい、

哲 あ、そうそうそうやった。はい、社長。

梅子 社長？

哲 こいは、えつと、パイ、ナップルの缶詰、こいは、えく、よっさん、何やったかね？

吉松 コンビーフ、牛肉の塩漬け。

哲 あ、そうそう、牛肉の塩漬けたい、

吉松 どっちもアメリカ産の高級品ばい。

伸代 アメちゃんの缶詰ね、

吉松 闇市で流れとるごたつ安物じゃなかばい。

哲 コーヒーや紅茶もあるですよ。

吉松 (商品を手に取り)メリケン粉、チューインガム、何でんあるばい。

哲 何でんあるですよ。

梅子 あんた達、こがんとどがんしたと。

吉松 輸入したったい。オイ達は貿易会社ば作ったけん。なあ哲。

哲 はい。

伸代 貿易会社？

吉松 こん哲とオイはシベリアの収容所仲間たい。

哲 どうも。

吉松 二人で会社ば作ったけん、二人の名前ばとって、(哲に)

哲 吉あんど哲…よっさん、何やったかね。

吉松 「世界貿易カンパニー」たい。

哲

あくそうそうそう「カンパニー」やったね。

吉松

カンパニーは会社っていう意味、まあ主おもに海外から食品ば輸入する会社たい。

梅子

(怪しい)ふくん。

吉松

ふくんって、知り合いのよしみで安うしとくけん、一つ買うてみんな。

伸代

(うさん臭いと思いつつ)こいは、いくらすつと？

吉松

最高級のパイナップル缶詰、お買い得の五十円たい。

伸代

は(あり得ない)五十円、

梅子

そしたら(コンビーフ)こいはいくらすつと、

哲

百二十円。

伸代

百二十円って、

梅子

馬鹿じゃなかと、

伸代

こんご時世に、そがん高つかもんば誰が買うね。

吉松

そいけん言いよるやろ、そんじよそこの安物じゃなかとつて。アメリカ軍の将校が食べよる最高級の品物ばい。

梅子

そがん高級品は東京にでも売りに行けば良か。

伸代

そうそう、ここにやそがん訳の分からん物ば、高つか金出して買う人間はおらんとよ。

哲

よっさん、

吉松

哲、やっぱい物の価値の分からん田舎者は話にならんね。アメリカ直輸入の本物とに。

梅子

アメリカアメリカってアメちゃんの食い物がそがん有り難かとね。

伸代

そうたい、戦争に負けたけんで、腹ん底から負け犬になつてしてもて。

吉松

あく敗戦国の人間はひがみっぱか。

梅子

つてあんたは何人ね。

吉松

オイ達は自由人たい。な、哲、

哲

う、うん、そがんです。

伸代

(馬鹿にした笑い)何ね、自由人で、

下手奥より凜登場。

凜

おはようございます。

梅子

お早う、凜。

伸代

おはよう。

吉松

おく俊平の女房、ちよつと、ちよつとこつち来て。

凜

あつ、この間はどうも、

吉松

挨拶は良かけん、こつち来て。

凜

何ですか？

吉松 珍しかアメリカン食い物ば持つて来たたい。ちよつと見てみんね。

凜 はい、

伸代 凜、相手にせん方が良かよ。

吉松 だまっとれお前達や。

梅子 訳の分からん品物しなもんば高たかう売りつけらるつよ。

吉松 商売の邪魔すんなって。

伸代 進駐軍の倉庫からかつぱろうて来た品物しなもんらしかよ。

哲 よ、よっさん、

吉松 お、お前達や、何ば言いよつとか、

梅子 あれ、もしかして本当にそうね。

吉松 誰だいがそがんことすつか。

伸代

あららら、(缶詰を手に)こいは盗品ね。

吉松

(奪い返し)こら、お前達やもう触るな。

笑っている伸代と梅子。

凜

あの、

吉松

何ね。

凜

アメリカの食べ物はいらんですけど、小豆あずきは無かですか。

吉松

小豆、

凜

はい、お彼岸には、俊平さんのお膳にボタ餅ば上げたかと思とりますけど、小豆がなかなか手に入らんけん。

吉松

俊平の、

梅子

あゝ陰膳かげぜんね。

伸代

え、陰膳つて凜、あんたんとこ、今もご飯のたんびに俊平の分まで作いよつと？

凜

はい。

梅子

そりや大変かねえ。

凜

いえ、二人分作ったとば三つに分けて、結局、後でお義母さんと二人で全部食べよるだけです。こまか茶碗に少しずつついで、ままごとばしよつごとして、楽しかですよ。

伸代

ばってん毎日のことやる。あんたは偉かあ。

梅子

留守の亭主が旅先でひもじか目に遭わんごとしていう「願い」たいねえ。

伸代

俊平は本なこと良か嫁さんば貰たばい。(吉松を見る)

吉松

馬鹿馬鹿しか。陰膳とか、そがんだ迷信たい。

伸代

迷信でも、そん気持ちが大事故たい。

凜

あの、小豆は、

吉松

(意地悪く)無か、無か無か、

凜

やっぱい無かですか。

哲

すんませんね。

凜

あ、いえ。

吉松

馬鹿馬鹿しか。そがきしよくわるん気色悪か話なら、もし小豆のあったとしても誰が売ってやるか。

梅子

吉松、あんた相変わらず器の小さかね。

吉松

哲、貧乏人しかおらん所じゃ商売にならん、場所変えるばい。

哲

う、うん、

商品を片付け始める吉松と哲。下手より定次と和尚が登場するが誰も気づいていない。

伸代

(軽口)こん男は昔からこがんやったとよ凜。

梅子

そうそう、戦争に行っても何も変わつとらん。(笑)

伸代　子供ん時のまんまたい。(笑)

吉松　せからしか。

定次　兄ちゃん、

振り返り定次を見るが、何も言わない吉松。場の空気を読んで、遠巻きに兄弟のやり取りを見守る梅子、伸代、凜。

哲　よっさん、

定次　兄ちゃん、

吉松　どなたさんですか。

定次　…何処行つとつたと。心配したとよ。

吉松　どこに行こうと、オイの勝手たい。

定次　…和尚さん、さつき話したウチの兄貴です。

和尚　ああ、吉松君。こんにちは。さいみょうじ西明寺のこうとく孝徳です。

吉松 …(いぶかしげに和尚を見る)

定次 前の和尚さん病気で亡くなって、代わって三年前からこちらの、

吉松 定次、気安う話しかくんな。

定次 …兄ちゃん、ここじゃ何^{なん}やけん、家に入って少し話せんね。

吉松 オイはもうお前ん事は弟では思とらん。哲、早よ荷物ば片付けんか、行くばい。

哲 う、うん。(荷物をまとめ始めるが、定次が話し始め、手が止まる)

定次 兄ちゃん、オイは怨みたかったら、いくらでん怨んで良か。ばってんこんままじや母ちゃんが可哀相かたい。母ちゃん、こないだ兄ちゃんが顔出してから、ずっと泣き通しで、

吉松 哲、荷物ば片付けろって、

哲 あ、ごめん、(再び荷物をまとめ始める)

梅子 吉松、一回家に帰って、家族で話し合うたらどがんね。

返事をせず片付けを続ける吉松。

定次

分かった兄ちゃん。そしたら、オイが考えた事ば聞いて。オイは家ば出ようと思とる。福岡の炭鉱で鉱夫ば募集しとるらしかけん、オイはそこに行く。そいけん兄ちゃんは家に戻ってくれんね。やっぱい兄ちゃんは長男やけん、

吉松

房子はどがんすつとか。

定次

…そいは…本人の気持ちが…。

吉松

本人の気持ち、(笑い)房子に訊いたらお前と一緒に言うたつて話か。

定次

兄ちゃん、

吉松

お前は房子と二人で楽しゆう暮らすけん、母ちゃんの面倒だけオイに見てくれつてか。ようそがんだ合ん良か話の出来んな。

定次

兄ちゃん、

和尚

吉松君、ちよつと良かね。

定次

引っ込んでくれクソ坊主。

和尚

く、クソ坊主、

梅子

(詰め寄り)吉松あんた罰の当たるよ、

和尚

(梅子を制し)まあ、まあ良かたい。

梅子

ばってん、

和尚

吉松君、君は誤解しとるよ。定次君はさつき私にね、房子さんば説得して兄さんのところに戻すにはどがんしたら良かるかって、相談してきたとよ。定次君は、兄貴思いの、

吉松

ちよつと待て、房子ば説得して、

和尚

そうたい、そいけん定次君は、

吉松

そがんだ大嘘たい、元々こん定次が房子ば口説いたに決まっとると。

梅子

吉松、もうやめんね。

吉松

房子はオイに約束したと、絶対に待つつて約束したと。そいばこん
定次が上手いこと丸め込んで、

伸代

吉松、いい加減にせんばよ、女の腐ったごと、

吉松

何でオイが責めらるつとか。房子だけじゃなか、お前達もみくんな
定次に丸め込まれて、ここじやいつん間にか女房盗られたオイが悪
者になつとるつたい。

定次

そうじやなかよ兄ちゃん。

吉松

定次、お前はく(定次に掴みかかる吉松、止めに入る和尚)

和尚

やめんか、やめんか、こら、

梅子

何ばしよつとね、

伸代

吉松、やめんね、

吉松

お前はオイばコケにして、

和尚

こら、こら、やめんか、

吉松
放せ、放せ、

和尚
吉松君分かってやらんか、

吉松
このガキ、

和尚
定次君の気持ちは、

梅子
吉松、(吉松をビンタ)

吉松
何ばすつとか、

梅子
あんた分からんとね、こがんなってしても、定次も辛かとよ、

吉松
はあ？どがん話か定次が辛かって、どがん話か、梅子。

伸代
吉松、女々しかよ。

吉松
伸代：オイが女々しかてか、何でオイが、

和尚
定次君は、兄貴思いの、

吉松 (叫ぶ)せからしかく、

哲 よっさん、

凜 …吉松さん、

吉松 (宣言)定次、よう聞け。オイはどがん事してでん、絶対に、絶対に

房子はお前には渡さん。(再び定次に掴みかかり)渡さんぞく、

定次の胸ぐらを掴む吉松を引き離そうとする和尚、梅子、伸代。少し離れて驚いて見ている凜。

梅子 吉松、

伸代 やめんね、

和尚 こら、こら、

吉松 この、この、

照明F.Oする中、もつれ合ったまま一同下手に。

和尚 こら、こら吉松君、

吉松 放せ、放せこの、

伸代 やめんね、

吉松 定次、

和尚 やめんか、

梅子 吉松く、

一同下手奥に消える。明るくなり、梶谷の家。

凜 とにかく、房子はお前には渡さくんって、宣言したとですよ。

ソデ (笑)そうね、そいはまた修羅場やったね。

凜 こん先、あの兄弟はどがんなるとでしょうね。

ソデ どっちにしても吉松には分の悪か勝負たい。

凜 房子さんの気持ちでしょう。それは仕方なかとですけど、ウチは

みんなちよつと吉松さんに敵し過ぎる気がするとですよ。

ソデ

そうね、凜はそがん思たね。

凜

はい、吉松さんの身に起こった事は思たら、もつと慰めの言葉があつても良かような気のするとですよ。

ソデ

まあ確かに吉松にしてみたら、何でみんな弟の肩ばつかい持つとかつて、思うやろね。ちよつとはオイにも同情せろつて言いとうなるかも知れん。

凜

そうですよ、ウチもそがん思います。

ソデ

ばつてん吉松はあがん性格やし、そいに比べて定次は本当出来た弟やもん、誰でん定次の肩ば持ちとうなるとじやなかと。

凜

そいは分かりますけど、梅子さんや伸代さん、吉松さんに、もうちよつと優しゆうしてやつても良かて思うとですよ。

ソデ

あん二人は、現実ば受け入れて初めて前に進めるて知つとるけんじやなかと。同情じや腹は膨れんもん。

凜

…同情じや腹は膨れん、ですか。

ソデ

伸代ん亭主はフィリピンの沖で船ば沈められて、骨も帰って来んや
った。梅子ん亭主は帰ってきたばってん、足は片足たい。こまんか
子供かかえて家は支えるとは自分しかおらん、二親も空襲で亡くし
とるしね。

凜

：ばってん強かですよね、あん二人、いっつも明るかですもん。

ソデ

笑おとらんやったら生きて行けん、そいば知つとるけんよ。梅子や
伸代にしてみたら、吉松は生きて帰って来ただけ恵まれとる、甘ゆ
んなって尻ば叩きよつとかも知れん。そいがあん子達の優しさじゃ
なかと。(笑)

凜

相変わらず、お義母さんは鋭かですね。ウチと違うて人の心の機微
ば知り尽くしとるとですね。

ソデ

おだてても何も出んよ。(笑う二人)

照明が変わり、夜、村田家の玄関先。上手から、泣きながら飛び出してくる房子、少
し遅れて後を追って出てくる定次、手に房子の下駄を持っている。

定次

義姉さん、待って、待ってって。(立ち止まる房子の正面に回り込

み)何ね、下駄もはかんで飛び出して。(しゃがんで下駄を履かせる)母ちゃんの性格は知つとるやる。口は悪かばってん腹は何も無かつて。

房子

そいにしても、あん言い方は酷すぎる。

定次

許してやらんね。死んだて思とつた兄ちゃんが帰ってきて、母ちゃんもどがんしたら良かか分からんごとなつとるとやけん。

房子

お義母さんだけじゃ無か、定ちゃんもたい。

定次

オイが、何ね、何ばした？オイはいつも義姉さんの、

房子

ほらまた、

定次

え、

房子

あん人が帰って来る前は、房子って呼んでくれよつたとに。

定次

…そいは、

房子

そいは何ね、定ちゃんは勝手に、ウチば義理の姉に戻してしもたとね…ウチは、ウチは嫌、そがんと嫌。

定次 義姉さん、

房子 そいけん、嫌って言いよるじゃなかね。

定次 オイば、困らせんでよ。オイも…本当は…。

戸が開き、トメ登場。

トメ 定次、定次、(トメには暗がりの二人は見えない)おらんとね。

定次 母ちゃん、義姉さんば見つけて、すぐに戻るけん。

トメ 何ねあん人は、癩癩持ちたいねえ。腹かいてぶいって飛び出して、子供んごと、

定次 母ちゃん、外は冷ゆるけん、家に入って待ってとって。

トメ あんたも風邪引くよ。もう房子さんは探さんちや良かたい。どうせそんなうち帰ってくつとよ。

定次 うん、すぐに見つかるて思うけん。

トメ

定次、ウチャあんだ達兄弟が喧嘩するぐらいなら、房子さんにはもう実家に帰って貰もらって貰もらって良かて思いだしとるとよ。

定次

母ちゃん、

トメ

いっそ房子さんは返して二人とも新ふたしか嫁さんば探した方が、後腐れん無のうして良かつちやなかと。

定次

何ば言いよつとね、母ちゃん、

トメ

そうたい、房子さんはそがん良か嫁でも無かとやけん。

房子

(かみ殺した声)…定ちゃん、

定次

母ちゃん、(叫ぶ)いい加減にせんね。

トメ

…定次、

房子を抱きしめる定次。

— 暗転 —